

四十 風景を再構成するために

二〇一五年は、敗戦から七十年の年とあって、その七十年を体験した人たちの著わした書物がいくつか出版された。わたしも、戦後史を知りたいと思い、手始めのつもりで一つ二つの書物を読んだ。わたしの求めていたのは、むしろ距離を置いた態度で出来事を冷静に描いた歴史書だったのだが。二〇一五年はまた、国会が成文を書き変えることもせず再び憲法を変更した年でもあった。七十年の歳月は、この国を変質させて、新たな状況へ、とても不安定な状態へもたらしたのである。過去のことよりもこの現在の状況の方が重大な事態だと思う。

二〇一五年に形をとって現われた事態は、前年十二月の総選挙前に予測できたことである。国会の議決は主権をもつ国民が選挙で選んだ代議員によってなされた。民主主義制度の働き方は一筋縄にいかないもので冷酷すぎる言い方になるが、ひとくくりに言えば、国民がこの事態を招いたのである。われわれ国民は、将来起こるだろう苦難に責任を負わなければならない。

しかしだからといって、多数の人間の構成する社会で、人ごとに責任の軽重があることを帳消しにしてはならない。国会で事実的な憲法改変を主導した総理大臣と閣僚たち、法案に賛成した代議員たち、それをお膳立てした官僚たちに、順に重い責任がある。国民は、自責の念を感じるとしても、彼らに責任のあることを将来まで忘れてはならない。現代の社会では、国民の世論を導くのに大きな力をもつマス・メディアの報道責任者も責任を逃れるわけにはいかない。だが、さらに責任の軽重を言い続けると、責任の所在が拡散してうやむやになるから、ここで中断するのが適切だろう。もう一度言えば、われわれはこういう事態に立ち至らないようにもできたのである。このことを、とおりにいっぺんの言葉ではなく反省する必要がある。

成文憲法の文を書き変えずに解釈変更し、基本法の成文と矛盾する法律を制定することは、国際社会に名誉ある地位を得ようとする国がなすべきことではない。品位ある人間のすることでもない。それは、国内においても、言葉を無効にし、つじつまの合わない行為を行なうことをためらわせないだろう。道理が失われるのである。だから、二〇一五年に起きたことは、移り行く世の一コマとして見過ごしにしてはならない重大な出来事だったのである。そう考えれば、一度目の憲法九条の解釈変更もとしかえしのつかないことだったのだ。今日のこの国はそのような国としてあり、そのような社会にわたしは生きている。

知識の足りない者でも、考え出すと少しずつ言葉は出てくるものだ。こんなことをしているのは、辺見庸の『1★9★3★7』を読んだからである。あの人の鋭利な思考に押しこまれて自分を失わないように、現在流通している単語ではなく自分の身についた言葉で考えてみようとして、たどたどしい文になった。わたしの生成文法の古さを表わすのだろう。その書物の題名は一九三七年に起きたことを論じると表明しているようだ。だがこの人のことだ、二〇一五年のことを言いたいにちがいない。わたしは、戦争法案可決の事態に応答して出版されたいいくつかの書物ではなく、異形の表記の書名で過去を提示するこの書物を読むことにした。そうして、前段のような思索が出てきたのである。

最近詩作も始めたらしい辺見庸は、あの鋭敏な身心で、現在の状況の根を把握しようとしてどこまでも深く考えつめる。そのために、現在の基層をなすと考えるものがあらわに出現した一九三七年を凝視する。この年七月七日に日本が中国侵略を始めた戦争の初期、人間が外国で現実にした残虐な行為を、目を背けずにあばきだす。それを無かったと言いくるめ、あるいは蓋をして見えないようにする人間たちが多いなかで、一九四四年九月生まれでそのときまだ生まれていなかった著者が、南京をはじめとする諸都市や農村での虐殺とあらゆる種類の非道の証言を探し出して考える。自分の父のことにまで肉薄して、現在

の日本人の父祖たちの罪を身に引き受けて考えようとする。この痛切は耐えがたいほどだけれども、現在しっかりと地に足をつけて立つために、辺見と同学年で半年あとに生まれたわたしにも必要な作業なのだと思います、読み続けた。ひるむわたしは逃げて、人間が為しえた非道の記述はその書物に負わせよう。だからといって、そういう状況にじっさいに置かれたときわたしは非道から遁走できはしないと、彼の考察は追いつめてくる。たしかにそうだろう。なんということだ。

書物『1★9★3★7』が告発するのは、戦争というものの怖ろしさである。どんな言葉でやわらげても逃れようなく、戦争は、その時代の人間を蟻地獄のように暗い穴の底に引きずりこむ。あとがきの日づけを戦争法案可決の日とした著者は、現在、戦争への動因が胚胎していると考えているのだ。そして、この書物が一九三七年の背景に浮かび上がらせるのは、日本人にしみこんでいる思考様式である。著者の大きな危機感、ほとんど絶望は、戦争の前から戦争中もさらに現在まで、その同じ思考様式と思潮が続いていることにある。

詩人である辺見庸は、対談で串田孫一が語った「人間が全部滅亡してしまったときのあの風景というのを時々思い描く」という言葉を引く。このイメージは、「ファシズムと

も国家主義ともいわない、全体主義ともいわない。末期資本主義ともいわない。ただ、社会の流れをじぶんでなっとくがいくようにまとめられない」という感慨に続いていたらしい。それは、辺見自身が現在の日本の社会に対してもつ評価・判断であり、そのイメージでもある。石巻出身の彼は、大地震と津波による東日本の大災害のあと、すべて失われた風景という同じイメージを、どこかに書いていた。この書物の赤い表紙は虐殺された人間の血にまみれた身体を表現していて、著者の心のなかには黒々とした「きれいになくなった世界」の風景があるのだろう。

しかし、心性の異なるわたしは、この暗いイメージのなかにとどまることができない。辺見庸は、多くの書き物を著してしているから、もつと違ったことも考えて記しているだろうが、わたしは、自分の力でこの風景から脱出する方途を探し出さなければならぬ。ぐしやぐしやになった風景を再構成したい。なにもかも壊れてしまっても再生のための種子が残されていると信じたい。また、ぎこちなく考える。

この書物は、根源的に考えるために、日本の戦後思想の形成に加わった何人かの人たちまで吟味する。そのなかでも節目ごとに引用されるのは堀田善衛の『時間』である。『時

間』を読んだことはないけれども、引用された文は人間の奥深くまで見究め、フィクションでの思索が哲学に迫っている、と思う。厳しい辺見もそれを否定的に取り扱うことがない。わたしは、堀田善衛が戦争の時代に生きた人たちを題材に選んで書物を著わしたことに思い当たった。鴨長明とライヴアルだった藤原定家のことを書いたのは、動乱の世に生きた二人を対位させて考えるためだったのだろう。だが、齢を重ねて戦争の傷跡の湿りがうすれた後年、孤塔にこもって考えた人のことを思索したとき、フランスでのとほうもない宗教戦争のことではなく、その狂乱に対して人間の品性を保った人のことを書きたかった、モンテーニュが暗い風景のただなかでも立派に生きること努めたことを言いたかったのだ、とわたしは思う。

一九三一年から一九四五年までの十五年戦争のあいだに異様な姿となった日本精神が、古代にまでさかのぼる根をもち、今日までなお息づいているという見方は、基本的には、日本人の考え方の傾向と行動のパターンを考えた先人が指摘したものにつながり、何らかの意味で正しいだろう。しかしそれは、日本人の精神の中核的な位置を占めて全面的な支配力をもっているだろうか。そうだと考えるのは宿命論に陥ることではないか。

素朴に考えてみよう。「ここは特別な国で、自分はその特別の国の民だ」というような考え方は、村の祭りに参加する人が感じる高揚感のような原初的な未分化な感情にすぎない。それでも、祭りに参加するわたしはその高揚感を大切に思うから、それを大切にすることはよいことだろう。だが、「ここ」に隣村を当てはめることができて、彼らも同じ感情をもつ。すると、お互いにその感情を大切にすることが、立派な人間のすることである。どの国にもそのような情念がある。問題は、そのような感情を暴走させない、多方面に向かう精神をいかに育てるかである。

歴史上、愛国心の異様な姿は、抽象的な国全体のあり方や存亡を問う政治で現われた。ほかの国の国民も程度の差はあれ同様だということに注意しなければならないが、日本人は、こういう抽象的な政治的問題に現実的で健全な判断ができるように精神を鍛えてこなかったのだ。大陸から離れた島国でそういう判断力を試される機会が少なかったからだろ。うか。歴史をていねいにふり返れば、一九三〇年代の軍国主義や全体主義や群集心理的フアシズムの特徴を帯びた極端な動きは、それ以前にはひどくなかったものである。

わずかに知ることだが、新井白石のような合理主義者がいたし、袋小路に進んだ本居宣長たちの国学を批判した上田秋成のような人がいた。帝国主義の絶頂期に至ろうとする危機の時代、急いで近代国家をつくるとき、木戸孝允や大久保利通たちは利用できる手段と

して天皇をかつぐことにしたのだった。その戊辰戦争でも、錦の御旗に對抗した人々がいたのである。古い考え方がたしかに身についていた。しかし、米欧回覧をとみにした木戸や久米邦武の内面の他方には、開明的な考え方も根づいた。久米の「神道は祭天の古俗」とする論は、精神の吟味を経て著わされたのである。

それなのに、成立した政府は、体制を強固にするために、近代的な学校教育によって、古俗に近代的な装いをほどこして情念として日本人にすりこんだのである。ここに問題があったのだとわたしは思う。明治維新から三十年以上経って書かれた久米の歴史学の論文は、国体に対する不敬として非難されることになる。こういう場合に、日本の集団主義社会の不自由さが表われる。社会が真綿でしめつけるような圧迫を加える。例外的に強靱な人しかこの圧迫に耐えることはできない。あいまいな妥協がはかられる。教育の射程はとも長く、今でも敗戦前の残響から抜け出せない人たちがいるのである。ところで、現代の日本人でどれだけの人が、代々一族から僧を出してきた皇室がもつばら神道に仕えるように「強制され」、位牌をまつる寺にひそやかにしか参詣できないことを知っているだろうか。この国は、主上臣下みなが不自由な社会なのである。辺見庸が指弾する一つはこの自由の欠落である。しかし、日本人も自由を求める心をもっている。

明治の近代体制ができてからの日本の歩みの暗黒面は世界史の歩みと同調していた、ということを知る必要がある。最近、二十年前に制作された「映像の世紀」十二編を見直す機会を得た。その映像は、日本の十五年戦争が、世界を覆っていた思潮や行動様式の一部だったことを示している。それぞれの国は、資本主義経済がまだ十分地球規模になっていない時代、袋小路に入った帝国主義の闘争を決着させる戦争に突き進んで、それぞれ歴史を引きずる特有の症状を発症したのだ。日本とドイツとイタリアの非道は、共鳴していたと見なすことができる。イギリスや合州国でさえナチズムが現われたのだ。こう言ったからといって、わたしは、道に外れた自国の行為をうやむやにしようとするのではない。人間の為したことを歴史的に観るものでなければ、明瞭に把握し未来のために生かすことはできないと考えるのである。

歴史の経験法則の一つを石母田正流に要約すれば、「社会的機能を果たし終えた統治は頽廢的となり、統治者は道徳的に腐敗する。そして、住民も統治者の頽廢を分かち持つ」となる。一九三〇年代の日本は頽廢的という言葉では言い足りないが、歴史の証明するこの定理がそこで成り立っていた。日本の社会はその後、戦争と敗戦によって、体制を再建しなければならぬ事態になった。それがどれほど徹底したものだったかが影を落としているのだが、とにかく新しい体制で七十年歩んできた。そして現在、その体制は社会的機

能を果たし終えた、だから、政治権力を預かる者たちがこれほど道徳的に腐敗し、国民も頹廢を分かちもって世が混乱している、とわたしは考える。

しかし、現在の社会は一九三〇年代とは異なる状態にある。ここで露呈する悪は、かつてのものとかなり異なるものになると考えなければならない。資本主義経済がおおよそ十分地球規模になった。先進諸国では、自国内でこれまで通りの利益を上げられなくなった資本が、存在していたニッチを規制緩和などでとりこわして収益をあげることに努めるので、富が相対的に貧しい人々から少数の富者に移転しつつある。これがさまざまな症状を見せて先進諸国に起きている困難である。そして、地球全域への資本の循環に乗って生産の大きな部分を受けもつようになった新興国まで、すでに問題に直面し始めている。物も人間も思想も国境を越えるグローバル時代、世界中で社会が新たな音を立ててきしんでいる。とりわけ日本は、人口が増大し経済が拡大する時代が終わってからの対応に失敗し、大きな困難に右往左往しているのだ。辺見庸が危機感をもつように、多くの国民がずいぶん過酷な目にあうことを覚悟しなければならないだろう。それでも、痛みをやわらげるためには、現状を冷静に正しく認識することから始めなければならない。

政治的社會の動きを考えるのに宿命論的すぎてはいけないと思う。たしかに、多数の人

間が構成する社会全体の動きは、個々の人間が制御できないほど重量があり大きな運動量をもつから、その方向を変えることはたいへんむずかしい。歴史上、ほとんど方策を知らなかったほどだ。それでも、なんとかしたい人々の長い悪戦苦闘が方向を転じさせたのである。それに、現代の権力を具体的に考える場合には様相が違う。権力を握る者は当座の政治問題の舵をとる権限を持つにすぎない。その権力者を過大に見てはいけない。歴史をふりかえれば、歴史を転換させた人物たちは、権力者と己を知る孫子の兵法を識って動いたのだ。行動者でない者がこのように言うのはおかしいけれども、道を誤る権力者に有効な対抗策を考え出し行動することが肝要なのだと思う。

辺見庸のめぐりだす人間が根源的に悪から自由でないことは、忘れてはならない問題として常にわれわれの前にある。人間が未熟な生き物であることは宿命である。われわれが、空虚で、邪悪を覆いつくすほど愚かで、はかなく、悲惨を通り越して卑しいことをよく知っていて、それでもなおモンテーニュは、品性をみがくことが人間の課題だと自らかみしめたのである。現実論者に現実を知らないと言われても、人間にその道を追求するよりも勝る生き方はない、それよりほかに悪から少しでも逃れる方法はない、とわたしは思う。

だれもが考えることのできるような、歴史修正主義者でも知っているような、青臭い議

論しかわたしにはできなかつた。まだまだ考えるべきことがあると思うが、なにもかも打ち壊された風景を整理し直して、もう一度意味のある風景を構成するのに、力の無いわたしは、このように素朴な思索しかできなかつた。

二〇一六年、四月